

# 作文指導

## ——その体系と指導への手がかり——

畑 実・鈴木洋一郎・酒井為久・佐藤クニ子

### I はじめに

#### ① 今年のねらい

昨年度本校では共同研究として学習困難点の分析をした。その一環として国語科でもその一端を本校紀要第6集に載せた。今年度からその困難点の対策ないしは除去の方途を講ずることになったが、とくに書くことに重点を置くことになった。というのも、昨年度まで不十分ながらも読むことへの対策を講じてきたし、一方書くこととくに作文力の低下は最近やかましくいわれ、その方面の指導はゆるがせにできないからである。しかるに書くことの指導はなかなかむずかしい面があり、全国的にもその指導は低調であるというのが実情である。思うに書くことと読むことは表裏の関係にあり、十分に書けないことは読解が不十分である場合が多く、また文章に表現することにより構想力・思考力も大いに練られて読解力が高められるものである。

中学・高校の全学年に亘ってその年間計画をたて、有効な指導をするのが望ましいのであるが、今年はその手がかりとして中学2年を主として取り扱うことにした。

#### ② ノートはきちんと

4月始めに今年を書くことにとくに重点をおくことを生徒にも徹底させておく、そして書くことの基本としてノートをきちんととること、従って時々ノートを点検することにした。そのためには板書にも気をつけなければならない。板書のしかたにはいろいろあるらしいが、右半分は消さないたいせつなことを書き、左半分は書いては消すという方法をとっている。たしかにノートのとり方のじょうずな生徒は成績もよい場合が多い。月に一回ノートを点検しABCの評語をつけている。

#### ③ 年間計画

教科書の書くことの単元に二、三回の書く機会を持たせることにした。即ち、教科書には一学期に感想文・説明文、三学期には生活文の単元がある。そこで①4月から5月にかけて感想文と説明文、②夏休にも

同じく感想文と説明文、③10月に感想文、④11月に紀行文、⑤1月に生活文の5回に書かせる。以上の中で説明文にまず重点をおくこととし、一学期には主題と構想に重きをおき、二学期には叙述に重きをおき、三学期はその総合・仕上げということにしたい。総まとめとして三学期に中学の文集を作る。

### II 実施経過

1 単元「感想文・説明文」の指導、14時間

① 「最後のひと葉」(オーヘンリー作・吉田甲子太郎訳)を学習する。(5時間)

ア. ねらい——この単元は一応書くことが中心ではあるが総合的な扱いを忘れなかった。つまり読解をしっかりやっておいて話すこと聞くことにも亘り、最後に書く力を高めようとした。

イ. 読解と書くこととの結びつき——読んでだいじなことをノートに抜き書きさせ、それを見ればこの作のあら筋がわかるようにさせる。生徒はどうしても詳しく書きたがるので、きわめて簡潔にするように巡回指導する。このことは逆に、作文の際の構想をたてる練習にもなる。しかもこれは読みが深くなければできないことである。生徒の要約例を次にあげておく。

#### ○A生徒

1. ワシントン広場の西に二人ですむ
2. スーとジョージは同じ性質
3. ジョージが肺炎にかかる
4. 医者が「十に一つしか助からない」といった
5. 「生きる希望をもてば助かる」といった
6. ジョージが「つたの葉も命もなくなる」といった
7. パーマンにそれを話す
8. 最後の一葉が残る
9. パーマンの肺炎
10. ジョージ生きる希望をもつ
11. ジョージ助かる
12. パーマンの死をきく
13. 最後の一葉はパーマンの傑作

○B生徒

- ワシントンの一角
- スーとジョージ
- 共同のアトリエ
- 肺炎（ジョージ）
- ツタの薬
- 死の覚悟
- バーマン
- 嵐
- 残った一枚の薬
- 希望
- バーマンの死
- バーマンの傑作

○C生徒

- ワシントン広場の一角
- スーとジョージ
- 肺炎にかかったジョージ
- ジョージの空想（死）
- バーマン老人
- 一枚のつたの薬
- ジョージの回復
- バーマン老人の大傑作
- バーマン老人の死

ウ。「最後のひと薬」の読後感を書く—— a, 参考文としての『『最後のひと薬』をよんで』を読み、感想文の書き方を学ぶ。どこに主題をおくか、どういふふうな組立てにするか、どういふふうに表現するかの三点について学びとる。

b. 各自の感想を書く。まずノートに書かせてから原稿用紙に清書させる。主題を書き、構想をたて、全文を書き、できたらそれを推敲する、という手順にした。この間教師は机間巡視をして個人指導にあたる。原稿用紙の書き方をかんでふくめるように注意して、清書は家庭作業とした。主題・構想の部分についての生徒のノートの例を次にあげておく。

○D生徒

(I)主題 人と人との友情・愛情

(II)構想

1. 書きはじめ。よみはじめはつまらない
  - よんでゆくうちに感動
  - スーの友情
  - バーマン老人の犠牲的精神

2. 中心
  - バーマンの番犬の役目
  - バーマン老人の孤独
  - 笑い飛ばすバーマン

3. 結 び ○人はみかけによらない

○生きる希望はすべてはいけない

○E生徒

1. バーマン老人の犠牲的精神
2. 自分との比較
3. バーマン老人の心のやさしさ
4. バーマン老人の「つたの薬」は傑作である
5. 嵐の夜の行動
6. 友情をそだててゆこう

② 「二つの坂道」（生徒作品）「感想文というもの」を学ぶ。（3時間）

ア. 日常の見聞に取材した「二つの坂道」という感想文について、書き方の悪いところ、不足している点を吟味する。

イ. 「感想文というもの」を読んでノートに整理させる。印象の消えないうちにすぐ書く、相手にわからせるように正確に、相手の共鳴をよぶように具体的な論拠をあげる、生きたたとえを有効に使うのもよい、などという答が出た。

ウ. 5月の連休を利用して見聞したことに対する感想文を書かせた。

③ 説明文「ニシン」を読む。（4時間）

ア. 「ニシン」を読解して説明文のあり方を学ぶ。つまり主観を交えない事実だけのこの文の特色と、ある体系ないしは順序をもった記述のしかたを知る。

イ. すぐ説明文を書けといってもむずかしいので、書こうとする題目をいわせてみる。10人ぐらい出させて思いつかない生徒の参考とさせた。

ウ. 図書館で書かせる。参考資料を利用してうまくまとめるようにする。しかし結果は後述するように上乘とはいかなかった。

④ 批評会を開く。（2時間）

ア. 提出された三種類の作品からおのおの二篇ずつ計6篇を選んでプリントする。1組48名を8班にわけた。

イ. 班毎に以上の作品を批評してそれをまとめる。次に各班の代表者2名が全員の前で発表し討論する。これは話す、聞くの学習も考えてしたことである。

説明文「カとハエ」のごときは図入りでよくまとまっているという評であった。

⑤ その結果

ア. 本単元終了後次のような簡単な調査をした。

1. どの文がいちばん書きやすかったか。

	男	女	計
(1)読 後 感	3人	18	21
(2)日常経験の 感想文	17	18	35
(3)説 明 文	34	6	40

2.書きやすい理由

(1)読後感。思った通り書けばよい	15人
○ 主題がつかみやすい	2
○ 限定されるから集中できる	2
○ 小学校からよく書いている	2
(2)日常経験の感想文	30
○ 身近なことだから書きやすい	30
○ 好きなことが書ける	3
○ 形式ばっていない	2
(3)説明文。調べたものをまとめるだけで主観を入れなくてよい	24
○ 参考になり勉強になる	4
○ 調べることは楽しいしおもしろい	4
○ 題材が多くて自由に選べる	4

イ. 処理した結果——三つの作文を比較したら次のようになった。

1. 評価の面から

種類	評価			構想			叙述		
	A	B	C	A	B	C	A	B	C
(1)読後感	18	65	13	13	51	32	10	64	22
(2)日常経験の感想文	9	48	39	11	33	42	5	55	36
(3)説明文	13	67	16	10	62	24	9	65	22

2. 形式面から

種類	項目	句読点の不全	文法的な不備(主述・語序・修飾等)	送りがな・仮名づかいのまちがひ	誤字脱字	きれいな字(よいもの)	字の大きさ(平均)	字
(1)読後感	26		6	21	37	17	610	
(2)日常経験の感想文	16		4	13	30	19	590	
(3)説明文	12		0	5	19	22	1060	

評価は主題・構想・叙述の三観点からABCの三段階とした。形式的な面からすれば作文を課せば課すほどよくなる。内容的な面からは三つが異質のものだけに比較ができないが、読後感ができがよく、日常経験の感想文が悪く、説明文はまあまあというところである。説明文は最初のこととて参考資料をまる写しのものもあった。日常経験の感想文は生徒のあげた理由では書きやすいようだが、実際にはなかなかむずかしいものである。

2. 夏休みの宿題としての「感想文」「説明文」

① 夏休みの国語科の宿題は他教科も出すので作文に重点をおいた。一学期に行なったと同じものを課してそれをよりよいものにしようとした。まず「読後感」はあらすじを書いてから感想を書くようにした。これは要約する練習にもなると考えたからである。「日常経験に取材した感想文」は夏休みが長いことでもあり

多くの題材にぶつかるだろうから、その中から最もよいと思うものを選ぶこと、またよく見、よく聞き、よく考えることが基礎であることを強調した。「説明文」については前回のように書物を写すだけというのではなく、経験したことたとえば観察、実験の説明ものぞましいものであることを強調した。

② 「読後感」の題材としては日本文学の山本有三、芥川龍之介、夏目漱石などの純文学作品が半数を占め、他は少年少女小説その他といったふうであった。前回の作文に比べて文章も長くなり内容的にも全般的に向上がみられた。

「日常経験の感想文」では臨海学校のできごと、旅行先のできごとなどが多く、対公共的なもの対社会的なものに目をむけている。前回に比べてよく見聞きしており思索のあとがうかがわれる。著しい向上はみられないが若干の向上がみられた。

「説明文」では「牛乳の成分」「らく焼」「一日の気温と湿度」「あさがおの開花」など実験・観察に関するものが多かった。主題がはっきりせず、構想も不十分なものが多かったとはいえ、とにかく自分の文章を書いているという点で進歩があった。また事実と意見の混同もみられた。この点は今後大いに練らねばならない。

3. 読書感想文コンクール

10月下旬に図書館が主催して行う「読書感想文コンクール」がある。国語科としてはこれに強制的に参加させている。前回までは主題・構想に重点をおいたが、今回からは叙述の面も強調した。つまりコンクールであり、全校生徒に読まれることを意識すべきであり、相手にわかりやすく、訴えるような選択されたことばも考えるべきであることを強調した。その結果、形式的にも内容的にもすぐれた作品が多かった。

4. 紀行文

これは系列的にいうならば説明文と感想文とを総合したものといえるだろうか。11月中旬に蘇水峽に徒歩遠足を実施したが、その模様を書かせた。その前準備としてツルゲーネフ作・米川正夫訳の「森とひろ野」(「獵人日記」の一節)と、国木田独歩の「武蔵野」の一節を学んだ。1時間を使って主題・構想・書き出しにあてた。構想の中でどこに中心を置くかをよく考えさせた。清書は家庭作業とし、いい題を考えるようにともつけ加えた。その結果は全行程をだらだらと書いたものもいたが、特に印象に残った箇所を詳しくいきいきと叙述したものもかなりあった。また事実と意見・感想とが巧みに使いわけられたものもかなりあった。次に書き出しの例を数例あげておこう。

## 作文指導——その体系と指導への手がかり

- 「あゝ、やっと着いたね、八百津に。」
- 道が長い、足が重い。「こんなつらい遠足は初めてだ」と思った。
  - トロッコのような電車でゆられる1時間。
  - 悪は出発からつきまとったのである。
  - 歩く、歩く、また時には走る。
  - 丸山ダム、それは少し行けばダムがあり水がザアザアと流れおちている。そう思いながらダムに向かった。
  - 「やおずー、やおずー。」かん高い駅員の声でふと我に戻る。

### 5. 今後の予定

- ① 三学期に「生活文」をとりあげることになっている。こゝでは前述したように主題・構想・叙述を総合的に取り扱い、書くことによって生活を考えさせることもさせたい。
- ② 最後のしめくくりとして中学全体の文集を編集す

る。これは昨年から実施しており、タイプ印刷で40ページのもので作文の時間に利用した。今年はまだ少し大部のものとしてできれば活版印刷にしたい。これは生徒の創作意欲を大いにたかめている。これはそれまで提出された作品の中から優秀なものを選んで戴せると、そのとき臨時に作品を募集するという二本立てでゆきたい。

### Ⅲ む す び

自明のことだが作文は書けば書くほど上達するものである。だが事後処理の問題がたいへんであってそうむやみに回数はふやすことはできない。二学期に弁論大会が毎年行われるので、全員に論文を書かせてみるのも一法かと思う。回数としてはそれを加えたぐらいが適当ではなからうか。しかし短時間のドリルの時間を数多く持つことは非常に有効である。来年は今年にかんがみ、3カ年の体系とその指導法を確立したい。